

広島俳句倶楽部

令和四年五月作品集

USJ

ふじ女

USJ(ユニバーサルスタジオジャパン)は、大阪の淀川河口付近の南側、桜島にあるテーマパークで、二〇〇一年に開園しました。映画の世界を体験できるテーマパークで、様々なアトラクションやイベントがあります。開園当初は、ハリウッド映画の世界が中心でしたが、最近は、ゲーム、アニメも主流になりつつあります。二〇二一年にオープンしたスーパーニンテンドーワールドが今は人気を集めています。仮装したり、お揃いの服を着たり、カチューシャを着けたりなど、人々の遊び方、楽しみ方がいつも新しい場所です。

三月のバレード金髪のうさぎ

啓蟄や横 一列のミニスカート

春めきし飛沫の水上コースター

向こう岸 歓声遠く水温む

原色に黄砂降り積む遊園地

歓声と轟音渡る鳥雲り

木の芽風楽隊過ぎて紙吹雪

密集のものの芽上向きの花壇

陽炎は港の倉庫また倉庫

ここはまだ立ち入り禁止クローバー

《作品鑑賞》

垂矢

「USJ」は、作者の視点が、はっきりと外に向けられた作品である。

テーマパークにしながら、一歩引いた作者の立ち位置は、私にとっては新鮮だった。名詞止めの句がほとんどであることから、勢いと歯切れの良さを感じる。

三月のバレード金髪のうさぎ

冒頭からインパクトのある句。おのずとワクワク感がわきあがる。

歓声と轟音渡る鳥雲り

アトラクションの音と、それに乗る人たちの声だろうか。人々の様々な感情を、季語に込めているように思った。

木の芽風楽隊過ぎて紙吹雪

一転して、全てがさわやかな句。しかし、時節柄胸にじんときるものがある。色とりどりの紙吹雪に祈りを込めたい。

ドライブ

友岡葉山子

早めに昼食を済ませ、良いものを見せてやると言う夫にハンドルを任せてドライブに行きました。途中、彼方此方に寄りながら鞆の浦へ。丁度夕日の落ちる時間に合せてくれたらしく、「これよ。見せたいもんは」と夫。夕日が海を真赤に染めていました。その美しいこと。兵衛湖の夕日とは違った夕日がそこにありました。潮風に頬を撫でられながら、心地の良い時間を過ごすことができました。

滑らかに岩撫でて落つ春の水

幼子の一音に吹くしやばん玉

クローバー姉と摘みたるかの日かな

春嵐に向かつて傘を握りしめ

やうやくに一句を得たり春の宵

畦道に揃へてありぬ早苗籠

鯉幟尾びれが枝に絡みたる

新茶の香しきし伏せたる句集かな

鞆の浦真つ赤に染めて大夕焼

通信使見たであらうか鞆の夏

《作品鑑賞》

高尾ひとみ

あちこち寄り道をしながら、春の一日を、そして、俳句を楽しんでおられることがよく伝わってくる作品です。作者は熊野在住の筆づくりの職人。通信使の筆による額を見られたのでしょうか。書を見ると、それを書いた人に思いが及ぶのだなあ、と感心しました。それにしても、葉山子さんご夫妻、いぶし銀の輝きです。

滑らかに岩撫でて落つ春の水

岩の上を滑らかに流れる川、山の中の景色だろうか。撫でるという言葉が、季語「春の水」らしい。

クローバー姉と摘みたるかの日かな

子どもの頃、よく原っぱで花の首飾りをつくった。クローバーを見たとたんに、姉との思い出がありありと浮かんできたのだ。

通信使見たであらうか鞆の夏

鞆通信使は、鞆の浦を「日東第一形勝」と讃えた。息をのむその美しき、燃えるような鞆の夕焼けに、遠い昔、かの地を訪れた異国の人に思いを馳せたのだ。

佐保光俊

まづ花を昇つてゆける朝日かな
湖へ駆けては花に戻る子よ

村上正人

川に沿ひ満開の花連なれり
人知れず夜明けの桜散りにけり

高尾ひとみ

夕星にいよいよ花の暮れなづむ
散る花にひととき音の消えにけり

秋沙

花の中枝移りする雀かな
峠越え訪ぬる里や花曇

あざみ

花愛づる基地の兵士の車座に
暮れてゆく窓に桜の揺れてをり

亜矢

上る人下る人あり花の山
並びたる露店の灯り花の冷

綾乃

君待てばなほも目映ゆき桜かな
卒業の子らの見上ぐる桜かな

井藤希

花の雲見下ろす丘に二人で来
午後の日に花散りやまぬ奥の院

英一

花を見に上着一枝足して行く
花の咲く岸辺に動く人の影

栄吉

谷川を飛び越してゆく櫻花
散る花をまた巻き上げて谷の風

大畑恵

脱藩の道に桜の咲いてをり
朝早く回り道して桜見る

暁子

汐入の波が片寄す花の塵
散り残る桜に雨の降り出しぬ

新庄憲彦

枝ごとに揺るる桜の重さかな
花の土手抜ければ工場湯気を吐く

すみれ

杖を置き歩く川辺の朝桜
老桜の房大空に揺れるたり

知佳子

それぞれの家に桜のありにけり
見上げたる顔に桜の散りかかる

ちどり

川土手のずつと光まで桜かな
母を乗せ車の中に花を見る

雲雀

背伸びして車椅子から花にふれ
一日を桜の下に過ごしたき

ふじ女

ブランコに黄色いテープタ桜
花篝胸の内なる空気が燃ゆ

松田裕子

初桜朝から空の晴れわたり
海光の届く桜の駅に降り

森口良樹

ひとところ日向となりて花筵
竿を差す舟にほどけて花筏

遠藤さつき

暮れ六つの鐘の鳴りをり花の雨

上島康子

踏切の向うの山は花に満ち

河原静子

キャンパスに広島城の桜描く

紀英子

弟も居て夜桜を楽しめり

熊谷ゆり子

この花を見上げて寺に集ひたり

桑門わかこ

山門の内より眺め花の雨

高嶋絹代

はらからの上野に集ひ花疲れ

高梨英子

始まりは小さき塊花筏

民

桜見る幼子の声遠くまで

ちかこ

一駅を歩いて戻る桜かな

辻純江

桜蔭降るや八十年を生き

友岡崇山子

サイドミラー後ろの花を映したる

撫子

花吹雪ひとり受けたる朝の道

村上理江

散る桜回りてナースの靴紐へ

みさ子

ベランダに花の風吹き友の来る

美耶

花の塵ひらりと落つる鯉の上

やす保

花盛り飛び交ふ鳥の声高く

山崎桂子

服に散り靴に散つて花吹雪

山野ウタ

自転車を止めて見てゐる花の土手

みづうみに山は雪解を急ぎをり

白梅の香れば月の上りけり

白梅に顔を向けたる夕べかな

大なる蔭を持ちたる桜かな

蝶は舞ひ桜は吹雪き神の前

きんばうげ神と神とも戦ひし

月星の歩み正しき花齋

伯耆より戻りて盛ん春の雨

囀や安芸の雨雲切れ始め

日の出までまだ少しある花水木

佐保光俊

川風に吹かるる藤を見て歩く

伝き相撲身を反らし伝く子どもの日

芍薬のてんでに揺るる垣根かな

土橋を過る早さよ柳籠

近づけば鳥の巢の声静まれり

洗濯機止めて蛙の声を聞く

明け始め山へ傾く夏の月

筍に庖丁入るる心地よさ

飛行機雲果てまで延びて風薫る

午過ぎの風の強まる樟若葉

村上正人

虚ろなる風に梅の香ありにけり

前髪を梳いて梅から風の吹く

潮騒の空切つてゆくつばくらめ

朧より日は昇り日は傾きぬ

あかどきの空は桜に明けにけり

花の下カヌーは赴くままに行き

とことばに桜は吾に咲きにけり

大路ゆく人に桜の散りにけり

天地の合間を花の散りにけり

春の鳥夢の中まで探しをり

高尾ひとみ

今年また車庫に燕の来りけり

しげしげと泥啞へ来る燕かな

巢燕の身を乗り出して餌を食ふ

電線に燕賑はし朝餉どき

汽水川の浅瀬を擦つて燕飛ぶ

橋の下ぐぐり抜けては燕飛ぶ

切株を囲み蓬の生ひにけり

地に触るるばかりの枝垂桜かな

八重桜川風に揺れ咲きにけり

樟落葉風に吹かれて散りにけり

秋沙

花万朶工事車両の行き交うて

崖覆ふブルーシートや春落葉

交はりし航跡別れ暮の春

飼育箱の幼虫を撫で夏近し

注射終へ山藤を見る下り坂

しばらくは景桜の下たちるたり

ばつさりと鉄線花剪る朝かな

病院の待合室のアマリリス

夏の月亡き俳人の声を聞き

タンバリン振られ叩かれ五月かな

亜矢

静けさや白木蓮は風のなか

桜葉降る川沿ひを歩きたる

八重桜今朝より町に散り始む

長閑なり遊覧船に手を振る子

青麦を流るる風が届きたり

あちこちの庭に薔薇見る昨日今日

緑蔭やブロンズ像の乙女居て

冷し鮎清水坂に夫と買ふ

万緑や近江ぐるりと見渡して

おねだりの口に寄すソフトクリーム

綾乃

沈丁のことに香れる雨の昼

沈丁の落花の道の掃かれをり

ふらここの妹見守る男の子

この藪のうぐいす上手く鳴きにけり

石段を遮るやうに花の満つ

瀬野川の流れ増したり花冷えて

窓の雲動き出したる四月かな

妻と来て野辺に揺れたる花馬酔木

天風やひとときは白く躑躅照る

城山の天辺までの若葉かな

井藤希

裏庭の桜を散らし列車去る

長堤に桜葉降る日暮かな

白蝶の付きて離れぬ車椅子

ひもすがら暗き谷間の蛙かな

横臥して突いてみたるクローバー

春の蚊の付いて乗りたる深夜バス

磯遊び犬も一緒に濡れてをり

景桜や間に合うたりと友来る

汽車待ちのホームの屋根に夏燕

新緑が海を隠せる物見窓

栄吉

春霞裾野の広き富士の山

鶯の川向うから聞こえけり

春紅葉透かしてはるか空の見え

車窓より春の嵐を見てをりぬ

庭先の薔薇を飽かずに眺めたる

蔓薔薇や吾が背丈より高く咲き

いづこより来しか小庭の青蛙

病院の窓いつばいに夏木立

故郷の木蔭に咲きし菖蒲かな

夜の更けて遠く聞こゆる時鳥

大畑恵

囀や奥つ城までの細き道

路長けて八十八夜の雨に濡れ

遠忌かな山家に桐の花こぼれ

風走る代田や峡は晴れ渡り

竹藪を抜ければ首夏の海に出づ

車窓より見る溪谷に山法師

薰風やバスを降りれば家郷なり

バス降りて一步に匂ふ権の花

緑さす窓にシヨパンを聴いてをり

えごの花零れ夜雨の石畳

すかんばの伸びる引揚記念館

乗継を待つ山間の日永かな

眩しきや落花の上にまた落花

春灯の天橋立見下ろせり

細波を立て鷺の行く代田かな

田植時丹後の薨輝けり

橋脚の汽水深きを鮎のぼる

羽衣の松蔭に居て南風吹く

停車場の真下に寄する夏の潮

朝顔の鉄塔半ばまで咲いて

我が庭の土を起こせば蛙出づ

水張りし田から蛙の鳴き始む

葦原に穂あり鳥の巣と思ふ

鉄塔に小枝を乗せて巣組みかな

蝶が蝶呼んで百花に群れるたり

筍を採す竹藪子らは散り

筍を湯搔く外室昼日中

薰風の濡れ縁に足投げ出せり

スグジイの若菜萌え立つ神の山

老鶯の中を杖突き歩きをり

暁子

新庄憲彦

すみれ

見上ぐれば公孫樹の花のこぼれけり
遠ざかりまた近寄りてチューリップ
夕蛙声する方を振り返る
音立てて鳩舞ひ降るる今朝の夏
鳥を越す飛行機雲や夏来る
繡毬花くぐりて朝の空仰ぐ
左右から葉音聞こゆる若楓
待ちをれば雲の晴れたる五月富士
鰐刺の群の一羽が海に入る
水音に沿うて歩ける薄暑かな

知佳子

天道虫早苗の葉先まで上る
余り苗蛙が卵産んでをり
母が家の裏の畑に苺熟れ
幼子と植ゑし苺の熟れにけり
園児らの走り回りて苺熟れ
不揃ひの真つ赤な苺筥に置く
朝摘の苺を一つまづ母に
母が家の裏に茄子苗届きたる
朝顔の苗を今年も夫が植う
母の家出るときに見る茄子の花

ちどり

若鮎を川に放してこの笑顔
時忘れ四つ葉のクローバー探す
川底に川藻の揺れて風薫る
訪るる十三回忌牡丹咲く
息災と添書のあり新茶汲む
ピアノソロ静かにひびき聖五月
酒好きのあては一品冷奴
草刈つて十薬の香の広がりに
水田の影の早さや夏燕
手花火や火薬の匂と子らの声

友岡葉山子

今日もまたミモザの家の前通る

鳴く声のまだ整はず蛙鳴き

蛙鳴く沢より山に登りたる

丘に立ち吾春風を味はへり

満天星の花の向うに瀬戸の海

花であり実の如くあり紅満天星

門前に人立ち止まる藤の花

四月には父の袴を広げ干す

母のよく作つてくれし浅蜷饅

庭の薔薇その色と香にすべてに触れ

雲雀

矢車の激しき空に放心す

夏めくやプリーツ広がる規則性

コーヒーの黒に揺れてる初夏の人

再会の五月見知らぬ街をゆく

手を振つて遠ざかる人まだ五月

物語薔薇は何度も緑り返す

まだ何も始まらないで薔薇の咲く

新聞紙包まれている薔薇の傷

薔薇だけの悲しみ落ちる花弁かな

豆飯は女子供で炊き立てを

ふじ女

春光や庇の影に鯉隠れ

芽吹きたるメタセコイアに雲一つ

五十年連れ添ふ人や花は葉に

つばくらめ低く飛んでは影を成し

つばくらめ一瞬白く光りけり

朝つばめ残像となり空に消ゆ

次の田へ流るる雲や田水張り

水田から水田へ初夏の風渡る

十薬の花咲く頃や祖母の家

昼の月したたる山の上にある

松田裕子

つばくらめ水田の空を飛びにけり
ひたすらに山葵の花の日に向かふ
野茨を標としたる秘密基地
落暉はや潜水橋に河鹿鳴く
水芭蕉行き交ふ人に風の吹く
エプロンを置いて厨に新茶汲む
老鷹のいつも遠くに鳴いてをり
蜘蛛の囀を小枝で払ふけもの道
今日もまたこの木に鳴いて四十雀
網戸から夕餉の声の聞こえる

森口良樹

薔薇園のアーチいくつもくぐりけり
薔薇園に見知らぬ人と語らひぬ
白薔薇の汚れ易きを見てゐたる
襖絵に雨と雷風薫る
山峡の寺は夏炉を絶やさざる
芍薬の薔の園く日の過ぐる
鉄橋が茅花流しに遠く見ゆ
灯台は樟の青葉に立ちてをり
枇杷の実に風吹いてをり熟れてをり

桑門わかこ

木洩れ日の木椅子に聞いて句鳥
在りし日の友かと思ふ桜人
踏石の靴に花屑二三片
坂下る肩先に咲く馬酔木かな
畑の高苳洗うて朝の仕事終ふ
ほととぎす始奏ホームの向う山
好物の鮓持ち母を訪ひにけり
大瑠璃の声遠ざかる植物園
青田風吹いて赤子の寢息かな

山野ウタ

雲走り野分の風と雨来たる

平原の小屋を揺らして吹雪きけり

風止んで雪ゆらゆらと降りつく

襟巻に子らの首なき如くなり

つばくらめ遙か来りて巣を作る

桜鯛釣舟に日の上り来て

雑草の中に雛雛粟すくと立ち

英一

氣象庁開花宣言昼餉前

ここよりは二筋の川初桜

花移る目白の足の細さかな

花吹雪地藏の前掛け新しく

実桜の赤し夫婦といふ月日

夕暮の五月の海にサツプ漕ぐ

母方の長寿の遺伝走り梅雨

辻純江

榛咲くや特急列車過ぎてゆき

薰風に向かふレガッタ太田川

梅檀の花碑にこぼれをり

母の居る病室の下花櫓

竹の子の通り道にも突き出して

竹皮を脱いで空へと伸びゆけり

熊谷ゆり子

春風にぬつと現はれ飛行船

夜の卓の寡黙となりて花疲れ

花疲れ湯舟に深く身を沈め

撮り溜めのビデオ見てゐる春の風邪

降り方のいまだ苦手なハンモック

下げ膳に残り物なき夏座敷

高梨英子

薰風や八の字に鳩向き合ひて

景桜やいつしか弦音止んでをり

宇品より眺むる弥山夏霞

波の音近くに聞こえ新樹道

海からの風に揺れたる新樹かな

夫握りし筍にある鍬の傷

撫子

風薫る師の庭に聴くドビュッシー

薫風や幼なじみと峽の宿

豊後路の山裾に吹き風薫る

初物の筍飯を供へけり

遠藤さつき

雀の子白詰草に紛れたる

薰風にとりどりの鳥鳴いてをり

薰風や制服の子の駆け出しぬ

軽やかにペダルを踏んで風薫る

上島康子

路を採る谷の静けさ風渡る

茄子苗に水遣りをする日課かな

黄の牡丹最後はすこし白さ増す

鉄線を昔の竹籠に活かす

紀英子

薰風や花壇の土を掘り起こす

艶やかに筍の皮重なれり

ジャスミンの香り漂ふ道をゆく

たつぷりと健診あとの葛の蜜

やす保

木の芽和へ色と香りに母思ふ

薰風のなか子らと行く世羅の里

山際の薰風をゆく散歩かな

金川昭子

雑草の中に混じりて牡丹咲く

筍の味付け母に追ひ付かず

球場の赤シャツ赤帽五月晴

河原静子

昭和の日鍬一挺を磨き上ぐ

オーボエの聞こえ坂道風薫る

早立ちの子らを見送り時鳥

高嶋彌代

巣作りの燕飛び交ひ鳴き交す

鯉幟強き風受け竿しなる

菟蓐の花の空へと決りをり

民

風董る八十路の集ふコートかな

青鳶の倉敷に見るエル・グレコ

夕風に我が家の薔薇の香り来る

ちかこ

今し方かさと音して椿落つ

目の前に落ちし椿を拾ひたる

宮裏の藪の竹の子子の高さ

みさ子

風薫る坂を一気に下りたる

古寺の奥に筍掘りにけり

咲き終へし薔薇に今朝も水を遣る

美耶

保育園となりの家に薔薇咲いて

夕立は友の声かと昼寝覚め

津田玲子

令和四年四月度作品集より

すみれ 私の選んだ十句

陪塚に春の焚火の人の影	佐保光俊
朝がくるたびに見てゐる牡丹の芽	村上正人
恋雀見上ぐる枝に鳴きつつけ	高尾ひとみ
あたたかや医師と笑顔で話して	亜矢
花の頃そつと直せる義父の夜具	綾乃
新任地語る若さや春の夕	井藤希
卒寿から便りの届く花の頃	雲雀
花の昼施設の母を連れ出して	松田裕子
三人を拍手で送る卒業式	森口良樹
歳時記のほころび直す弥生かな	高梨英子

ちどり 私の選んだ十句

霜強く真金に朝の来りけり	佐保光俊
風吹いて梅の香りの中に居り	高尾ひとみ
春草の名を言ひ当てて散歩せり	あざみ
無口な夫二階へ上る月朧	亜矢
あの窓は音楽室よ春の昼	栄吉
近道は畦から畦へ麦青む	曉子
旅の子が帰ってきそう朧月	ふじ女
てじてじと苺ジャム煮る朝かな	村上理江
休ませる棚田にげんげ広がれり	山野ウタ
花曇アルバム開く昼下がり	美耶